



# 園だより 2月号

新宿区立西戸山幼稚園 令和8年1月30日発

## 氷が割れた

園長 佐藤 淳穂

寒波到来の朝、園庭の金盥（かなだらい）に氷が張っていました。園カバンを背負ったままの子どもたちがどンドン集まってきて、大きな丸い氷を持ち上げたり、のぞき込んだりしています。少し厚みのある氷に入っている空気の泡が、朝陽に照らされて光っています。どの子も触りたくて手を伸ばすのですが、やっと順番が回ってきても、あまりの冷たさに持ち続けることができません。あ、Aちゃんが氷を落としてしまいました。氷はたらいの水の中で二つに割れてしまいました。

Bちゃんは小さくなった氷を両手に握っていました。握ったてのひらを開いて見せると、氷はじわっと溶けていました。寒い中、Cちゃんは登園時間からずいぶん経ってもそのまま保育室に入らずにいました。そろそろ声を掛けようかと目をやると、氷のかけらを滑り台の上から滑らせて「ウオーターライダー」と言ったのです。こんな遊び方があったか！と感心しました。東京で氷が張るのは一年のうちの数日です。その奇跡の朝に、氷の冷たさを感じたり特性に気付いたり…たっぷり氷に触れることができたのは幸せなことでした。

氷の物語はこれで終わりませんでした。太陽が高くなり園庭の氷がすっかり溶けた頃です。Cちゃんが「氷だよ」と丸く切った水色の画用紙を持ってきました。画用紙を氷に見立てています。それを見たDちゃんは四角い水色の画用紙にセロハンテープを貼って「光ってるの」と言いました。友達と一緒に体験した氷との出会いは、子どもたちの間ですぐに共有できる材料となっていました。Eちゃんもセロハンテープで光らせた水色の画用紙を持ってきました。三人は光る画用紙の氷を持って満足そうでした。青いビニールひもにその氷を数枚付けて「氷が溶けてる」と表現している姿は、まさに今朝の小さな出来事が心に刻まれている場面だと感じました。



その後、Cちゃんは画用紙の氷を床にはらりと落としました。見ると、丸い画用紙の他に小さな水色の紙が散らばっていて、「氷が割れたー」と言ったのです。これには驚きました。画用紙を重ねて持っていたのです。すぐにDちゃんもEちゃんも小さな水色の紙を用意して、床に落として氷が割れる瞬間を再現しました。三人は水色の割れる氷を友達や先生に披露して回り、朝の感動がよみがえったあちこちで歓声があがりました。

時間に追われて忙しい毎日。「豊かな時間とは」と考えさせられた冬の日でした。いろいろな「初めて」に出会う乳幼児期に、ものやコトにじっくり関わることの意味を再発見しました。